安城の歴史を現代に伝える情報誌

れきしみち

2026.4
No.140

P4…収蔵品紹介 本多正信と「本佐録」
P6…連載「安城にゆかりのある人々4」
P7…展覧会関連イベント/春の催し物案内
P8…さと会員募集/市民ギャラリーよりお知らせ

P2 特集
企画展

石川丈山（いしかわじょうざん）
―家康の近侍から文人へ―

1.詩仙堂図 富岡鉄斎筆（本館蔵） 2.月画賛 石川丈山筆（本館蔵） 3.「寿」石川丈山筆（本館蔵）

ANJO CITY MUSEUM OF HISTORY
安城市歴史博物館

れきしみち No.140 令和8年4月発行 編集・発行 安城市歴史博物館（指定管理者：安祥文化のさと地域運営共同体）
安城市歴史博物館 / 〒446-0026 愛知県安城市安城町城堀30番地 TEL 0566-77-6655

じんめんにゃん

令和8年度 安祥文化のさと会員 大募集！

情報誌のお届けや割引などの特典がいっぱい！

さと会員の特典はスゴイ！

じんめんにゃん

特典

1 情報誌「れきしみち」を年4回お届け！
2 歴史博物館の有料展示観覧料が2割引！
3 歴史博物館の常設展観覧料が年間通じて無料！
4 さとてらすのお食事・ドリンク400円分割引！
5 会員限定「さとスタンプラリー」にチャレンジ スタンプ数に応じた景品をプレゼント！

会費 600円

入会について
[入会受付] 令和8年4月1日（水）～
[支払方法] 歴史博物館受付かお振込みの2通り。詳細はお問合せください。

安城市民ギャラリーよりお知らせ

収蔵品展「四季をたどる～五感を研ぎ澄ませて～」

これまで安城市は、地元ゆかりの美術作家の作品を収集してきました。今回の展示ではこれらの収蔵作品の中から四季を感じる作品を紹介します。
作家はその豊かな感性で、身の回りのあらゆるものから制作へのヒントを見出します。作家の鋭い感覚は、四季の変化に五感を研ぎ澄ませて、得られたものを作品へと昇華させていきます。
作品に込められた四季の美の様々な魅力をご堪能ください。

[開催期間]
令和8年6月12日(金)～7月11日(土)
[休 館 日]
月曜日
[開館時間]
9:00～17:00（入館は16:30まで）
[会 場]
市民ギャラリー展示室 D･E
[観 覧 料]
無料
[主 催]
安城市・安城市教育委員会
[協 力]
安祥文化のさと地域運営共同体

山口豊泉 《高原の冬》

安祥文化のさと

「安祥文化のさと」とは安城市にある松平氏四代50年の居城跡を整備した安祥城址公園一帯の名称です

[全館共通事項]
住 所 / 〒446-0026 愛知県安城市安城町城堀30番地
休館日 / 毎週月曜日（祝日の場合は開館）、年末年始（12/28-1/4）

安城市歴史博物館 開館時間 / 9:00～17:00
TEL:0566-77-6655 FAX:0566-77-6600

安城市民ギャラリー 開館時間 / 9:00～17:00
TEL:0566-77-6853 FAX:0566-77-4491

安城市埋蔵文化財センター 開館時間 / 9:00～17:00
TEL:0566-77-4477 FAX:0566-77-6600

安祥公民館 開館時間 / 9:00～21:00
TEL:0566-77-5070 FAX:0566-77-6062

公式HP、SNSもご覧ください
安城市歴史博物館
URL / https://ansyobunka.jp/

企画展

石川丈山

―家康の近侍から文人へ―

観覧無料

4/11（土）～7/5（日）

休館日｜毎週月曜日※5月4日は開館
開館時間｜9:00～17:00（入館は16:30まで）

江戸時代初期の文人石川丈山は、和泉郷（市内和泉町）の出身です。現在、丈山の居宅があったとされる場所には、「丈山苑」があります。丈山苑は、丈山が晩年を過ごした詩仙堂（京都市左京区）や、丈山が作庭したと言われる渉成園（京都市下京区）、酬恩庵一休寺方丈庭園（京田辺市）をモデルとした丈山の世界観を味わえる施設です。丈山苑は平成八年（一九九六）に開苑し、今年で三〇周年を迎えます。この機に、歴史博物館では丈山に関する館蔵品を中心とした展覧会を開催することになりました。

石川丈山像　狩野探幽筆（詩仙堂蔵）
※展示は写真パネル
丈山80歳の時に幕府の御用絵師狩野探幽に描いてもらいました。
賛は丈山自身で書きました。

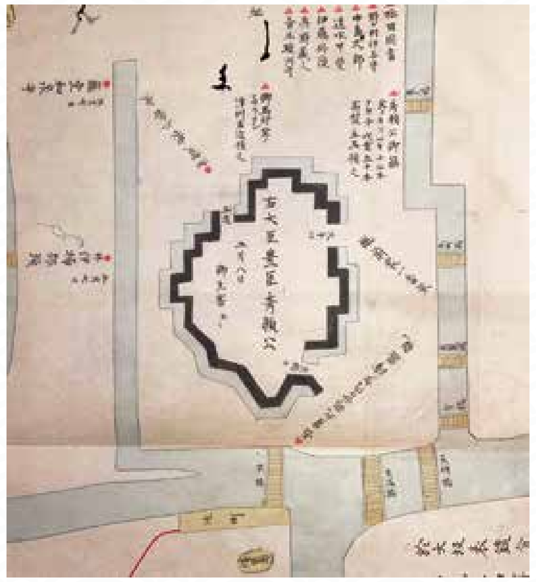
武士　嘉右衛門

天正十一年（一五八三）、石川丈山は現在の市内和泉町に生まれました。石川家は、安城松平二代長忠以来、松平家に仕える家柄でした。丈山の母は、石川家同様代々松平家に仕える本多家の出身で、家康の参謀として仕えた本多正信と多くの武功を挙げた本多正重は、丈山の大叔父です。

慶長三年（一五九八）、十六歳の頃、父の死をきっかけに家康に召し抱えられることになりました。元服して嘉右衛門重之と名乗り、常に家康の身辺で勤仕しました。

慶長二十年（一六一五）三月に始まる大坂夏の陣では、五月六日に家康が大坂難波に到着した頃、直属の近侍の先登（一番乗り）を禁ずる命令が下りました。翌日、丈山は家康配下を抜け出て、加賀軍の先鋒を任されていた親戚の本多政重の軍に合流、大坂城への先登に成功し多くの敵を倒したと伝えられます。

戦が終わると、丈山は軍令に違反したため謹慎を命じられました。大叔父の本多正信は、丈山に恩賞がないのを愁いて、再び家康に仕官できるように取り成そうとしたそうですが、丈山は固辞しました。この時丈山は三十三歳でした。



大坂夏の陣立図（本館蔵）部分
左上の「加賀衆二番乗」が政重の軍です。玉造門から城へ侵入しました。

文人　丈山

丈山は、家康に仕えていた頃から詩歌を嗜んでおり、家康のブレーンと称される朱子学の儒学者林羅山とは旧知の仲でした。元和三年（一六一七）三十五歳の時、羅山の勧めで羅山の師で近世儒学の祖と言われる藤原惺窩に会い、これまで学んでいた禅から朱子学に専心するようになりました。

元和九年（一六二三）、四十一歳の時、故郷に滞在していた丈山は、代表作のひとつ、漢詩「富士山」をつくります。この詩について、羅山に評価を求め、目新しい巧みな仕掛けだと好評を得ました。同年、母親を養い孝行するために広島藩浅野家に出仕します。母が亡くなるまで十四年間務めた後、しばらくして相国寺（京都市上京区）の側に睡竹堂という居を構えました。そのうち学甫堂という三畳の書斎は、昭和四十六年（一九七一）頃市内和泉町丈山文庫地内に移築されています。

寛永十八年（一六四一）五十九歳の時に詩仙堂（京都市左京区）が完成し、寛文十二年（一六七二）九十歳で亡くなるまでの終の棲家となりました。

丈山は、詩、書、庭など多岐にわたり才能を発揮しました。詩は丈山の詩集である『覆醤集』等に見ることができます。『覆醤集』は、京都所司代の板倉重宗から板倉家の菩提寺である長圓寺（西尾市）へ納めるために作成を求められた詩集です。三百三十篇余りが収められており、前代とは異なる新鮮な詩と評価されています。書は特に隷書体を得意としていました。隷書体は中国漢（前二〇二～二二〇）の時代に定着した書体で現在でも日本の紙幣に使われています。線が太く横への流れが強調され、安定した印象を与えます。

『覆醤集』寛文11年（1671）刊行（本館蔵）部分
「富士山」は『覆醤集』の最初に掲載されていることから、丈山にとっても思い入れのある詩であると考えられます。

丈山が優れた書や詩を残せた背景のひとつには、当時を代表する知識人との親交が挙げられます。丈山の友人には、羅山はもちろんのこと、作庭家・茶人として名高い大名小堀遠州や書画に秀でた松花堂昭乗などが名を連ねます。また、武士の時代からの友人知人とも晩年まで交友関係は続いていました。板倉重宗もそのひとりで、丈山の支援者でもありました。他にも家康の重臣酒井一族や藤井松平五代信之との交流もあったようで、当館に書状が収蔵されています。書状からは丈山の日常を垣間見ることができ、書や詩などの作品から感じられる丈山の人となりとはまた違った一面が感じられます。

石川丈山像　松花堂昭乗筆（本館蔵）
昭乗は、人物や花鳥の絵を得意としました。

書画「厚薄」石川丈山筆（本館蔵）
隷書体で書かれています。竹筆で書かれており独特のかすれが見られます。

顕彰　功績を伝える人々

自分を貫く生き方と多彩な才能のためでしょうか、丈山は後世の人々を魅了し続けています。最後の文人画家と称される富岡鉄斎もその一人です。鉄斎は明治十九年（一八八六）に詩仙堂の住尼の後見人になり、大正十年（一九二一）には丈山の二五〇回忌に合わせて堂宇や庭園の修復を手伝っています。また、明治二十二年には市内和泉町の丈山邸址を訪れています。

石川丈山像　富岡鉄斎筆（本館蔵）　狩野探幽筆の丈山像を模した絵です。

故郷の和泉では多くの人が丈山の遺功を称えてきました。文政五年（一八二二）、都築弥厚は、丈山の顕彰碑を建てるため、羅山の家系を継ぐ林述斎に撰文を依頼しました。弥厚による石碑の建立は叶いませんでしたが、丈山生誕四〇〇年後の昭和五十九年（一九八四）に和泉町内会によって実現しました。大正・昭和期には、和泉の篤志家らにより丈山邸址の保存や丈山文庫の設立などが行われており、丈山の遺功や生き方は今も地元を中心に語り継がれています。

（文責：後藤麻里絵）

収蔵品紹介

本多正信と「本佐録」

（文責：水谷令子）

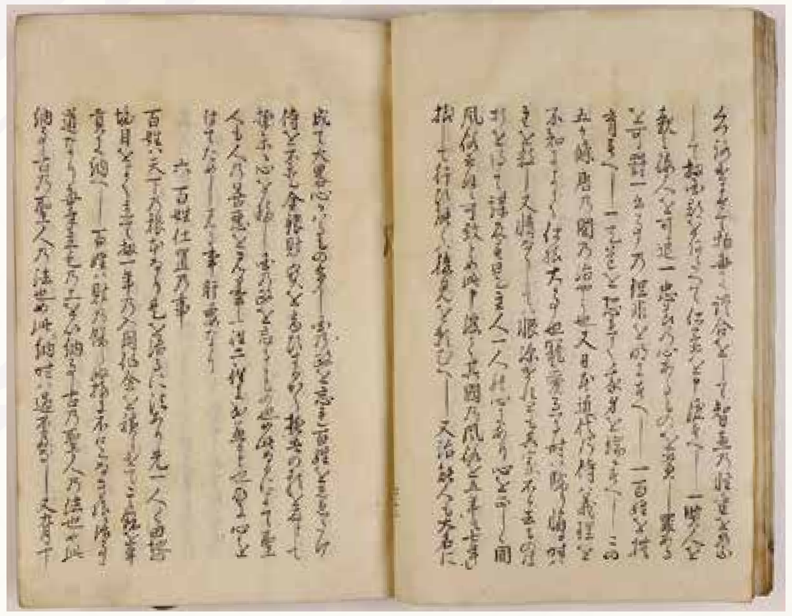
家康の重臣本多正信と弟の正重は今の安城市小川町に生まれたという説があります。しかし、市域には関連する史料はほとんど残されていません。

正信の著作といわれるものに「本佐録」があります。本多佐渡守正信から本と佐をとり名付けられたとされます。当館にも「本佐録」(二冊)の写本があります。市内桜井町にある桜井神社の宮司の家に所蔵されていました。正確には「本佐録」と附録の「本佐録輔翼抄」になります。「本佐録」は正信が二代将軍秀忠に、国を治めるための心得を説いたとされるものです。江戸時代には、藩主を始め庶民にも写本や刊本により広く流布しました。「本佐録輔翼抄」は「本佐録」を補うものとして後世作られました。ただし、現在の研究において「本佐録」は正信の著作ではなく偽書(著者を仮託した本)だとされます。「本佐録」の成立や思想については若尾政希氏や山本眞功氏による詳細な研究があります。両氏の研究を踏まえながら当館の「本佐録」を紹介していきます。

「本佐録」といえば、いまだに誤情報として伝えられる有名な一文があります。

百姓ハ財の余らぬ様に不足なき様治(る)事道なり

この部分だけを切り取り、百姓への厳しい搾取を説いたといわれるものです。本多正信の言葉として、昭和から平成にかけて長い間いわれてきました。江戸時代に家康の生涯を聞書の形で書かれた「落穂集」(巻之三毎年秋之収納の事)にある家康が説いた「百姓共は死なぬ様生きぬ様に」から派生して「生かさず殺さず」というのは正信の言葉とまでいわれてきました。もちろん「落穂集」には正信の名前はなく、正信と結びつける根拠は一つもありません。



「本佐録」第六条　百姓仕置の事

「本佐録」は、

一 天道を知る事

二 身を端にする事、附(我の誤り)身の行ひ国の政のあしきを前廉に知る事

三 諸士の善悪を知(る)事

四 国持の心を知(る)事

五 家を継へき子を撰ふ事、附後見の人并おとな役人えらひ候事

六 百姓仕置の事

七 異国と日本の事

という七か条から成り立ちます。第一条の天道は天の道、ことわりの道であり、天下を治める時は心形を労せず自然に治まりと記されています。第二条は天下を持つ人は身をただし、心を誠にして天下泰平に、万人安穏に、政事を行う時は天道にかなうとあります。前述の百姓の話は第六条に記されています。「百姓ハ天下の根本なり」として田地の境目をきちんと定めて、一年の入用の作物を見積もらせて、その余りの中から年貢を徴収することとあります。そして「百姓は財の余らぬ様に」と続きます。その後「百姓を労かし驕を極て天道に背き人、民にうとまれ後に必其身亡ふ」とみえます。つまり、百姓をひどく働かせ、おごりを極める人は民に疎まれ、身を亡ぼすとあります。第二条においても百姓を飢えさせず、こごえさせず、困窮させないとあります。これらは為政者に対しての心得や戒めの教訓であり、百姓をいたぶるようなことを書いたものではありませんでした。

「本佐録」序文

江戸時代に流布した刊本の「本佐録」には序文やあとがきの跋文がありました。当館の「本佐録」は写本ですが、序文のみがあります。

この序文の最初に「此書趣ハ 家康公御家老本多佐渡守正信本佐也」とあります。徳川秀忠が天下の治乱国家の盛衰、人君の存亡、万民の苦楽はいかなる所より起こるのか、正信に尋ねた時に答えたものを書き、献上したものと記されています。その後、秘蔵していましたが、この下書を正信は加賀の次男に送りました。ある時、加賀本多家の元家老戸田靫負助(亮)がこれを写し、それをまた三宅玄賀という人物が写した後に「本佐録」と名付けたと書かれています。戸田靫負助は佐渡守内儀方の甥とあります。

加賀本多家とは、正信の次男政重を祖とした加賀藩家臣の筆頭の家のことです。戸田靫負助は政重の家臣戸田靫負と思われます。正信の妻の甥なのかは不明です。

刊本にみえる「本佐録」の跋文は「鵞峰先生林学士文集」にも収録されています。幕府儒者の林羅山の息子鵞峰が書きました。跋文によると、この一冊は、題名なく作者なく「故本多豊前守正貫家」より出たもので、正信が儒者藤原惺窩に依頼し、秀忠に献上したものだと記されています。しかし、鵞峰は惺窩の著作では内容的におかしいとしています。それゆえ正信の著作とされたのでしょうか。正貫は、正信の弟正重の孫になります。正貫は、正信と正重の三十三回忌に顕彰碑を京都に建てていました。顕彰碑の撰文は林羅山が行い、篆額(碑の題字)を書いたのは、遠縁で正貫とも羅山とも親交のあった石川丈山でした。

正信に関わる家から伝わったとされることから正信の著作として広まっていったことがうかがえます。

この他にも加賀藩士で儒者の青地礼幹と兄の斉賢により「本佐録」が広められたことは山本氏の研究により知られています。礼幹は兄と共に室鳩巣に師事しました。室鳩巣は加賀藩に仕えた儒者で、新井白石の推挙により幕府の儒者となりました。青地兄弟が室鳩巣や新井白石に「本佐録」を本多正信の著作として認めるよう働きかけ、お墨付きをもらったことにより、世間に広まったとされます。青地兄弟の父定政は、加賀本多家の出身でした。加賀本多家や先祖である正信を評価することから動いた結果と思われます。なお、礼幹は正信の顕彰碑を建てた本多正貫についても把握していました。

また、「本佐録」のような教訓は、江戸時代に軍書として広く流布したともいわれています。当館の「本佐録」には購入時と思われる「本佐録 弐冊 軍書無箱之分」と書かれた付け札がありました。

ちなみに附録の「本佐録輔翼抄」の最後には、寛延三年(一七五〇)に隠居した八代将軍吉宗に献上する下書とありますが、真偽は不明です。「本佐録輔翼抄」は若尾氏によると神道・仏教・儒学の側面から「本佐録」をわかりやすく説明したものとあります。当館の「本佐録」及び「本佐録輔翼抄」が神道を学ぶ神主の家に伝わったのも、そういう背景があったのかもしれません。

幕府が編修した『寛政重修諸家譜』の正信の項目には「かつて治国のことを論ぜし書七条をしるしたてまつる。世にこれを本佐録と称す」とあり、長く正信の著作とされてきました。「本佐録」は執筆者を正信に仮託することで、幕府の権威や真実性を高める効果が期待され、広く世間に伝わりました。その一端として市域にも「本佐録」が伝わったものと思われます。

【参考文献】

若尾政希 「『本佐録』の形成―近世政道書の思想史的研究―」(『一橋大学研究年報 社会学研究』通巻四〇号 二〇〇二)

山本眞功 『偽書『本佐録』の生成』(二〇一五平凡社)

※史料の補遺については筆者が加筆しました。

連載

安城にゆかりのある人々4

中央精機創業者・石原勝一

今回は、本市に本社を置き市域有数の企業となった中央精機株式会社創業者の石原勝一を取り上げます。

石原勝一は、明治二十五年（一八九二）に徳島県麻植（おえ）郡西尾村飯尾（現吉野川市）で生まれました。農業を生業としていた父母の五人兄弟の四男として生まれた勝一は、飯尾敷地尋常小学校卒業後に郡立の農蚕学校（就業年限二年）に入学しました。明治四〇年代の徳島県内では、特産品であった藍の需要が冷え込み、藍から桑への転作が盛んに行われていました。卒業後は郡農林技手となり、三年あまり勤めたのちに京都高等蚕業学校で学び、母校の農蚕学校の教職の道を選びますが、二年で退職します。その後、奈良県宇陀郡や徳島県で郡技手・郡農林技手として一〇年勤めた後に、大正十二年（一九二三）に鐘淵紡績株式会社（後のカネボウ株式会社）に転職します。鐘淵紡績では三年ほど勤め、さらに転機が訪れます。大正十四年に石原は愛知県安城町大字安城に設立された愛知乾繭倉庫株式会社の支配人に推薦されました。乾繭倉庫とは、同年に農林省令で交付された「共同繭倉庫及共同乾繭装置助成規則」によるもので、乾繭（殺蛹・乾燥処理した繭）取引を推奨し、養蚕農家を保護するものでした。この会社は主要設備として乾繭倉庫・繭取引所を持ち、養蚕業者等の寄託繭の乾燥と保管、寄託繭の運送・販売斡旋、保管貨物を担保とする低利資金の貸し付けを業務としました。

石原勝一（中央精機株式会社蔵）

大正末期から昭和初期にかけて安城町を含む碧海地域は「日本デンマーク」と呼ばれていた時代でしたが、昭和五年（一九三〇）に始まる昭和恐慌は日本デンマークを揺るがす事態となりました。同年に町内で最大規模の職工数を誇っていた安城山丸製糸所の本拠である山丸組が倒産し、それにより山丸製糸所は安城町からの撤退となりました。製糸所の撤退は愛知乾繭倉庫も大きな損害を受け、石原は支配人としてこの難局を乗り越えました。しかし、昭和十一年に蚕糸業組合法が改正され、乾繭倉庫の運営が組合方式に切り替わると、石原は乾繭倉庫を去りました。昭和恐慌を契機とする製糸業の凋落や繭価格の低落に伴い養蚕業が全般的な縮小を余儀なくされたことにより、石原は鉄工業への業種転換を決意したのでした。

鉄工業への業種転換にあたり、石原の人生を大きく変える出会いがありました。トヨタ自動車工業で購買課長をしており、後に副社長になる大野修司です。この出会いによって石原はのちに中央精機の主力となる「ホイール製造」を志すことになりました。また、この時期は昭和十二年に日中戦争が開戦し戦時体制が本格化しつつある中で、安城町でも「農村都市」を目標に掲げ、工場の誘致を始めていました。石原は昭和十四年九月、安城町北明治に資本金二五万円、従業員二〇人前後という小規模で中央精機を設立しました。当初の事業目的は兵器や精密機械およびその部品の製造とされ、同十六年からホイール製造に乗り出しました。戦後は、一旦フライパンの加工や農機具等を製造して難局を乗り越え、終戦から三年後の同二十三年にホイール生産を再開し、同二十五年からの朝鮮戦争以降の自動車産業の発展に伴い事業を拡大し、市内有数の企業へと発展を遂げました。石原は創業以来「創意工夫」「総親和」「社会奉仕」を大切にしており、これらは社是とされています。

石原勝一自書の社是（中央精機株式会社蔵）

石原は、昭和二十七年から昭和三十八年まで安城市の初代教育委員長を務め、同四十年安城市の名誉市民に推挙されました。その後も同五十一年に八四歳でその生涯を終えるまで、数々の公職や企業経営に携わりました。

石原は、安城町が「日本デンマーク」から「農村都市」へと変貌していく時流を読み、業績を拡大し、利他の心で地域の発展に寄与しました。

参考文献
『石原勝一ものがたり』
二〇二四　pHp研究所
『新編安城市史3通史編近代』
二〇〇八　安城市
『第五〇回企画展 徳島の養蚕と製糸』
二〇一四　徳島県立文書館

文責：錦見和彦（安城市歴史博物館館長）

企画展 石川丈山（いしかわじょうざん）

―家康の近侍（きんじ）から文人へ―

記念講演会

「江戸時代の隷書と石川丈山」
[日 時] 6月27日(土)14:00～
[講 師] 劉作勝氏（愛知学院大学教授）
[定 員] 60名

申込期間
5月1日(金)～6月6日(土)
往復はがきでの申込は、6月6日(土)必着

あいち電子申請システム・往復はがきにて受付(抽選)
※往復はがきの場合は、イベント名、氏名、郵便番号、住所、電話番号を明記し、往復はがきにて安城市歴史博物館まで郵送。
※はがき1枚につき、1名申込となります。

歴博講座

「史跡『石川丈山邸址』に丈山は住んでいたのか
－考古学的視点から－」
[日 時] 4月26日(日)14:00～
[講 師] 後藤麻里絵(本館学芸員)
[定 員] 60名

当日受付

関連イベント

「作庭の美にふれる ミニ庭園づくり」
[日 時] 5月24日(日)13:00～16:00
[講 師] 竹内義統氏(ラプトルガーデン)
[定 員] 20名(事前申込み先着順)
[参加費] 3,800円
[対 象] どなたでも
※小学校4年生以下は保護者同伴
申込 5月9日(土)9:00～電話受付

「オリジナル印をつくろう！」
[日 時] 6月28日(日)10:00～12:00
[講 師] 香月久遠氏(全日本篆刻連盟理事)
[定 員] 20名(事前申込み先着順)
[参加費] 1,500円
[対 象] 小学校5年生以上
申込 6月7日(日)9:00～電話受付

「市内の丈山ゆかりの地をめぐるバスツアー」
[日 時] 6月6日(土)13:00～16:00
[行 程] 歴史博物館→学甫堂(丈山文庫)→丈山苑
[定 員] 18名(事前申込み先着順)
[参加費] 900円
申込 5月16日(土)9:00～電話受付

開催期間 4月11日(土)▶7月5日(日)

丈山苑コラボ企画

歴博・丈山苑でクイズに挑戦！
「石川丈山クイズラリー」 参加無料
丈山苑:別途入苑料必要(中学生以下無料)
「丈山くん塗り絵&缶バッジをつくろう!」
[参加費]100円(缶バッジ)
「丈山の書をまねて書いてみよう！」 参加無料

春の催し物案内

ミニ鯉のぼり染め体験

[日　時] 4月18日(土)10:00～12:00
[講　師] ワタナベ鯉のぼり株式会社
[定　員] 20名
[参加費] 3,000円
[場　所] 体験学習室
[対　象] どなたでも(小学生以下は保護者同伴)
[申　込] 4月5日(日)9:00～電話受付

鎧の試着会

[日　時] 5月3日(日・祝)
5月4日(月・祝)
5月5日(火・振休)
各10:00～15:00
[定　員] 1日15組まで
(先着順・1組最大5人までの試着可能)
[場　所] エントランスホール
[申　込] 4月12日(日)9:00～電話受付

さとのマルシェ 10:00～15:00 [会 場]安祥城址公園
※雨天中止

4/19(日) こども・楽しい・マルシェ
飲食のキッチンカーから雑貨やクラフトの店舗まで集うマルシェを開催します。ふわふわ遊具の他、ものづくりを体験できるハンドメイドブースも集合します！

5/30(土) 安城ゆかりマルシェ
安城にゆかりのある企業、学校、飲食、雑貨店舗が出店！(予定)

6/20(土) 子どもと家族の青空写真撮影会
同時開催イベント「子どもと家族の青空写真撮影会」を開催！

※定員数・開催方法や日時・内容等を変更する場合があります。最新情報はHPにてご確認ください。
※お客様よりいただいた個人情報は、本事業のご案内のみに活用させていただきます。

申込み・問合せ　歴史博物館　TEL:0566-77-6655